

片である。G区第759号土坑の堆積土より検出した遺物は珠洲第Ⅱ期（13世紀後半）に比定されるものである。青森市内での珠洲第Ⅱ期の検出例は青森市西部に位置する岡町(2)遺跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第232集）がある。近世の陶磁器は肥前陶磁器が出土している。時期は肥前Ⅳ～Ⅴ期に相当するものである。この他産地不明の陶磁器、時期不明のかわらけが出土している。

〔鉄鍋〕

平成13年度F区の第201号竪穴遺構から鉄鍋が出土している。形状から中世末～近世と思われる。詳細は補足に記載しているのでそちらを参照していただきたい。

〔文化遺物〕

平成12・13年度調査で女性顔・七福神・鳥を表した人形や像が出土している。

〔出土銭貨〕

平成13年度調査で寛永通宝が4点出土している。いずれも新寛永である。

3. 上野尻遺跡と周辺遺跡からみた宮田地域の中世

上野尻遺跡の4度にわたる調査で検出した古代～近世の遺構・遺物を見てきたが中世においては遺構・遺物が検出されている。中でも青森市内では出土例が少ない珠洲第Ⅱ期（13世紀後半代）の播鉢が土坑の堆積土中より出土していることから上野尻遺跡は13世紀後半には機能していたと言えないであろうか。中村良之進が昭和4年に記した『陸奥古碑集』には遺跡より1.5km西方にある念心寺に正応4年（1291）と延文2年（1357）銘の2基の板碑があったと記述している（中村 1929）。しかし正応4年の碑は現在行方不明となり延文2年の碑だけが残っている。遺跡より南に約1km離れたところに大銀杏の大きな木がある（図145）。菅江真澄は寛政8年（1796）4月20日にこの地を訪れて「…前略…吾妻山（東岳）の宮田という村にきた。この塚原のようなところに、ふるい銀杏（乳いちょうという）の木が二本たっている。寺のあったあとと思われて、五百年ほどむかしからの石塔婆がたくさんころがっていた。それを橋にして渡したのものもあり、あるいはおしたてたり、あるいは埋もれているものもあった。…後略…」とその著書「すみかの山」に500年程昔の石塔婆（板碑・五輪塔類？）が散乱する興味深い景観を書き残している（内田・宮本 1992）。500年前と単純に考えても1296年に当たり、行方不明の板碑に刻まれた年代に近いことが分かる。上野尻遺跡からやや距離があることに難があるにしてもこれらの結果も踏まえると上野尻遺跡は13世紀後半には機能していても不思議ではないことが理解できるのではないだろうか。

古代～中世にかけて「外ヶ浜」と呼称された陸奥湾沿岸地域の中で、青森市西部から東津軽郡にかけては青森市尻八館跡、内真部(4)遺跡や蓬田村蓬田大館跡等の調査により12～15世紀の遺構や遺物が検出されて中世の様相が明らかになっていたが、青森市東部の中世の様相はほとんど明らかでなかった。しかし、今回の上野尻遺跡の調査によってわずかではあるが明らかになったと言えよう。周辺の山下・米山(2)・宮田館遺跡でも中世の遺構・遺物が検出されている。今後これらの資料を検討することにより宮田地域、さらには青森市東部の中世が少しずつ明らかになる事であろう。

（齋藤 正）

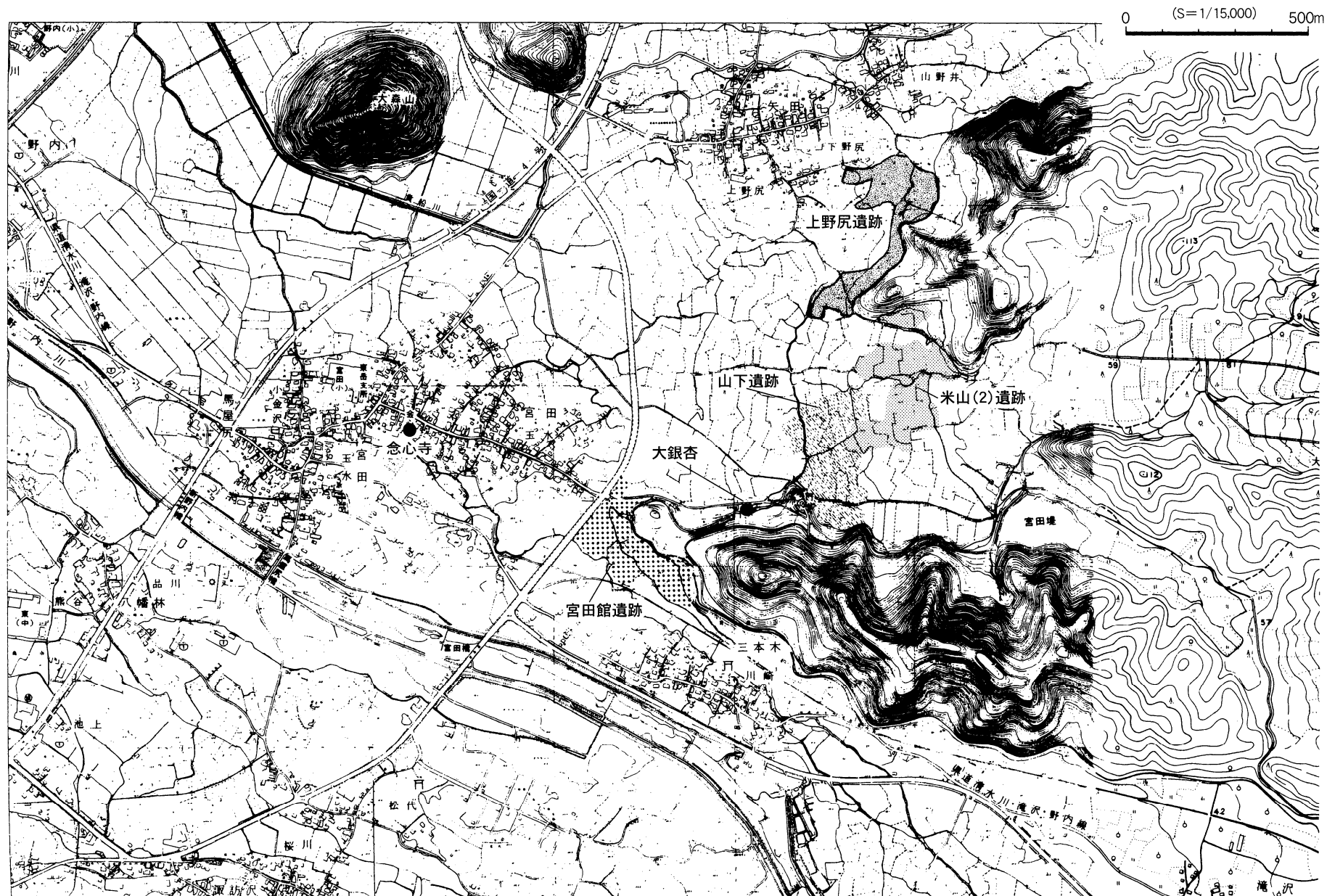


図145 上野尻遺跡と周辺遺跡・念心寺・大銀杏の位置